

# 京鹿子

平成三十年二月一日発行  
通巻一二二号(毎月一回一日発行)



2月号

鈴 鹿 呂 仁  
拾 掬 集 その二十九



日 和 見 と な れ ず 枯 草 ふ ん で ゐ る  
枯 草 の 身 の 程 を 知 る 風 の 沙 汰  
冬 至 南 瓜 小 言 納 め の 甘 さ 可 な  
門 限 を 念 押 す 母 や 冬 至 猫  
神 山 の 幣 さ ら さ ら と 冬 木 立 つ  
神 丘 の 冬 日 ま ろ ま せ 比 翼 句 碑



掃き寄せる落葉のひかり會津墓地  
歳晩の真ん中にゐる錦市  
歳晩や門古ぶ社家の門  
数へ日や負の足し算を打ち止めに  
去年今年平均台のわが足裏  
御多分の九分は言ひ訳年酒酌む  
新年へ星の帳を開け給へ  
千代に咲け上枝下枝の枯木星

(追悼・荻野千枝さん)



— 近 詠 —

鈴 鹿 仁

野風呂松

冬鳥の視点のなかの街の騒

冬鯉ののらり動けば水匂ふ

まつさきに初明りくる野風呂松

— 追 懐 —

山の巢へ一鳥急ぐ寒の雨  
〔平成十三年作〕

相槌は猪口に免じてぼたん鍋  
〔平成十三年作〕



—  
近 詠  
—

和田 照海

綿虫

綿虫の翔ちて和毛のただよへり

綿虫を視界に捉へ管制塔

綿虫の刻限どほり女院御所

冬紅葉拾ひ読みして院日記

鬼の笑ふ話ばかりやおでん酒



松本 鷹根

師 走 空

紅葉陽に透けて菅公御歌の磴

威勢よく鱒の撥ね合ふ夜明け網

山頂の足湯や志摩の師走旅

神苑に師走を鎮め棲む真鯉

見舞終へ一献欲しき師走空

## 近 詠



命の音

四脚門もみぢ一樹の散華かな

上段の間は仄暗き紅葉騒

さりさりと命の音か色葉舞ふ

床もみぢ水面もみぢの女院御所

もみぢ寺英語中国韓国語

塩貝 朱千

# 英華採集

一湾の落暉巻き上げ鷹柱

福 山 石 原 孝 人

今年もまた鷹がいつものように渡ってくる季節を迎えたが、作者の目には見慣れていない光景が広がっているのだろう。作者の住まいに近い尾道辺りの湾であろうか、正に鮮やかな夕陽が落ちようとしている。その瞬間を待っていたかのように鷹の群れは一つの風を捉えた。上五中七の措辞は、雄大にして且つ詩的な表現へと昇華したのは「鷹柱」の季語が見事に働いているとしか言い様がない。

いろは坂つの字くの字の薄紅葉

福 岡 上 原 玲 子

いろは坂と名のつく坂は全国に幾つかあるのかも知れないが、日光市街と奥日光を結ぶ観光道路のいろは坂は四十八か所の急カーブがあることから「いろは四十八文字」を喩えてこの名がある。いろは坂を形容するに「つの字くの字」と喩えたのは作者独自の表現と言えるが季語「薄紅葉」が良い。盛りを迎えた紅葉も見事であるが初紅葉に人々が待っていた秋の喜びを感じることが出来る。

討ち入りの日や穏やかに囲碁を打つ

京 都 林 田 紀 子

忠臣蔵ほど日本人にとって人の心を打つ話はないのではないだろうか。気心の知れた者同士が小春日和の一日、囲碁を楽しんでいる。それぞれ勝負の駆け引きの思惑を探られまいとポーカークラフィスを決め込んであるものの二人にはほのぼのとした時間が流れていく。討ち入りというセンセーショナルな出来事と真逆な囲碁の世界を結びつけたことよって取り合わせの妙を際立たせている。

# 神麓集

冬帽子 藤岡紫水

月あれば月の濕りにお茶の花  
陽を散らし銀杏落葉のどつと落つ  
一徹の感慨やいづこ冬帽子  
粕汁や空を細身に谿暮るる  
辛味噌を一匙加へ葉喰

日脚伸ぶ 沼田巴字

影といふもののやさしき十二月  
裸木のまはりは碧い空とのみ  
尉鷓孤独かこてば友が来て  
日脚伸ぶまだまだといふ人生論  
極月に待ち時間ありプルーストよむ

限界 丸井巴水

鴨撃たれ翅はハートの形で落つ  
限界に伸びし輪ゴムの霜囲  
風邪の喉ひらけ背凭れ無き椅子に  
人柱泣きし城下の虎落笛  
福寿草逢瀬短き野のほとり

走り蕎麦 植村蘇星

指す打つの触れ合ふ音や天高し  
天高しキリン伸びきり左見右見  
光国の此度の旅は走り蕎麦  
持ち味を生かし高みへ返り花  
もくろめる猫なで声の冬至かな



# 神麓集

春よ来い 北川孝子

春よ来い大事にしたき友の数  
去年今年生くる証の灯がまぶし  
曾孫といふ眩しきものを初湯なる  
ほのぼのとこの年ふくらむお正月  
道づれの相手あいまい夢はじめ

父の椅子 直江裕子

こんなにも奇麗にやつれ秋の蝶  
澄み切つた水に毀れた父の椅子  
心療科の窓すこし開く萩の月  
繚乱と錯乱ちがふ紅葉まつ赤  
芒吹かれ私吹かれ夢の途中

進化せず 高木晶子

新米に梅干一つ進化せず  
粗筋を少し省きて十三夜  
一寸の虫修業中石露明り  
落葉降り消え入りさうな影を消す  
群雀一人称に冬立ちぬ

秋 拾 伊藤希眸

泣きどころ抑へやんまの大を追ふ  
まな板の烏賊を捌かず秋拾  
川風の身に泌む空はウルトラマリン  
野原馳け野原を漕ぎぬぬのこづち  
冴え冴えと闇に鳴く虫輪廻かな

# 神麓集

十七文字 木戸渥子

十七文字と内縁関係新走り  
亡父母との隙間を埋めてちんちろりん  
秋陽浴び市電乗り場に佇つ司馬さん  
長き夜の隣家のピアノドレミドレミ  
有終の句会の題は社会鍋

あさき夢 奥田筆子

母はドレメ娘はドレミ金魚かな  
空間に凭れてバルーン黄色い秋  
節穴を覗くは卑しえのころ草  
天皇杯うつろな秋を置いてゆく  
あさき夢馬の香する秋の駅

仮橋 井上菜摘子

去ぬ燕見送る両手空けておく  
たつた姫村内放送が知らず  
踝をくすぐつてくる秋の声  
しんがりは人を見てゐる紅葉狩  
来し方に仮橋いくつ草紅葉

虎の退屈 村田あを衣

襖絵の虎の退屈秋うらら  
秋の蝶風の重さを翳にして  
すべり台すとんと着地冬隣  
のりしろを確かめてみむ冬はじめ  
冬籠達磨に手足描いてみる



# 京鹿子集

## 鈴鹿呂仁選

木の実降る古地図に探す白刃跡

京田 山中志津子

秋風に良心揺るる軽みかな

父母の思ひは名前後の月

過去形で語る抱負や虫繁し

水音に躓きもして冬籠

ていねいにきのふをたため冬籠る

はじまりもをはりも祈り秋の蟬

鳶からむ昔話のうそまこと

大鷹を追ふ一団の連写音

冬ごもるちひさな正義つらぬきて

遠浅の夜のとばりやちちる鳴く

城陽 鷺山 珀眉

りんごほぼぼるこの愛は未然形

鳶紅葉ときに幾何学的絡み

山茶花の余談のごときふたみひら

去るものは追はず枯野の色となる

ひんやりと人近づけし烏瓜

湖よりも山しづかなり帰り花

晚鐘や木の葉しぐれの音を追ふ

菊の香にある吉凶の記憶かな

冬の蠅ぼんやりとした不安あり

京都 片山 熙子

望月に雲慎みて控へをり

福 山 亀井 福恵

夕星に近づき過ぎて銀杏散る

秋裕ひとのかたち風に風入るる

飯の世に弾む日のあり石路の花

冬菜畑あをあと川ゆるゆると

一枚の紙の重さや月冴ゆる

旅好きの木の実飛び込む川下り

辛酸をなめて今ある紅葉かな

初冬の川のささやき聞きもらす

碧天へ大きく影を伸ばす鷹



一湾の落暉巻き上げ鷹柱

行く先は風に問へよと秋の蝶

遠き日の山は遊び場帰り花

切干の硬き手触り日の匂ひ

いろは坂つの字くの字の薄紅葉

京を過ぎなほ半円の秋の虹

福山 石原 孝人

福岡 上原 玲子

霧の奥へ奥へやがて私も雲になる  
玩具ごろごろばあばの寝床秋うらら

討入りの日や穏やかに囲碁を打つ

こがらしの一番があり無辺光

ファスナーの脱線多しそぞろ寒

冬麗やのろしあげてるのつぼビル

名残茄子はんなりと煮る祖母の腕

銀木犀祖父の散歩の袖時計

子等集ふ古刹訪ねし白木榎

粕汁や同窓会の誘ひ受く

空白く木の葉は茶色二月かな

窓からは枯木のレース風そよぐ

凧の時我も動かぬ冬うらら

何想ふ上枝に残る枯葉かな

白鳥のパスポートなくすまし顔

風もなく落葉や肩に舞ひ乗りぬ

秋の蜂リーフレットに乗り止る

今は無き屋敷の趾の尾花かな

新しいマフラーくるり息弾む

初物や香りと味は駿河みかん

子等の好物届いたばかりの初みかん  
道の駅きのこご飯に人並ぶ

京 都 林田 紀子

アリゾナ 伊吹 之博

オハイオ 水谷 直子

酒 田 藤波 松山

洪 川 東 秋茄子